

# 木更津市四房遺跡

—— 県立木更津高等学校第2体育館埋蔵文化財調査報告書 ——

平成13年3月

千葉県教育委員会

財団法人 千葉県文化財センター

木更津市四房遺跡

—— 県立木更津高等学校第2体育館埋蔵文化財調査報告書 ——



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第416集として、県立木更津高等学校第2体育館の改築に伴って実施した木更津市四房遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、砂丘列上における弥生時代の竪穴住居跡や中世の溝、耕作痕などが発見され、大型の弥生土器が出土するなど、この地域の土地利用の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

## 凡　　例

- 1 本書は、千葉県教育委員会による県立木更津高等学校第2体育館改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市文京4-1-1に所在する四房遺跡（遺跡コード206-023）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、研究員 高梨友子が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県教育庁企画管理部施設課、千葉県土木部營繕課、県立木更津高等学校、木更津市教育委員会、財団法人君津都市文化財センター、株式会社佐久間産業、甲斐博幸氏、森山 高氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 木更津市発行 1:2,500地形図（K-LE 32-1）を改図転載
  - 第4図 国土地理院発行 1:25,000地形図「木更津」  
砂堆・砂州、旧河道の位置は、国土地理院発行1:25,000土地条件図「木更津」をもとに、京葉測量株式会社による昭和42年撮影の航空写真から一部を推定復元した。
- 8 周辺地形航空写真是、京葉測量株式会社による昭和60年撮影の1:10,000のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
3 基本層序.....	4
第2節 遺跡の位置と周辺の環境.....	5
第2章 検出した遺構と遺物.....	9
第1節 遺構と出土遺物.....	9
1 積穴住居跡.....	9
2 土坑.....	16
3 溝状遺構.....	19
4 耕作痕.....	23
第2節 遺構外出土遺物.....	24
第3章 まとめ.....	26
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1図 調査範囲 .....	3	第11図 SI-006と出土遺物 .....	15
第2図 グリッド設定図 .....	3	第12図 SK-001・002・003・004・005 .....	17
第3図 基本層序 .....	4	第13図 SK-006・007・008・010 .....	18
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1:25,000) .....	6	第14図 土坑出土遺物 .....	19
第5図 調査区内全測図(1:200) .....	8	第15図 溝状遺構全体図 .....	20
第6図 SI-001 .....	9	第16図 溝状遺構土層断面図 .....	21
第7図 SI-001出土遺物 .....	10	第17図 溝状遺構出土遺物 .....	22
第8図 SI-002と出土遺物 .....	11	第18図 耕作痕 .....	23
第9図 SI-003・005と出土遺物 .....	13	第19図 遺構外出土遺物 .....	25
第10図 SI-004と出土遺物 .....	14		

## 図版目次

図版 1	四房遺跡周辺航空写真	SK-005 SK-006
図版 2	調査区発掘状況（東から）	SK-007 SK-008
	調査区全景（北西から）	図版 6 SK-010 SD-002
図版 3	SI-001	SD-003・004 SD-005
	SI-002	耕作痕検出状況
	SI-003・005	図版 7 出土土器・石器
図版 4	SI-004遺物出土状況	図版 8 住居跡出土遺物
	SI-004	土坑・溝状遺構出土遺物
	SI-006	図版 9 遺構外出土遺物(1)
図版 5	SK-001 SK-002	遺構外出土遺物(2)
	SK-003 SK-004	

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯

千葉県教育委員会（施設課）は、平成13年に創立100周年を迎える県立木更津高等学校内の第2体育館の改築を計画した。この事業に当たって千葉県教育委員会（文化課）に、予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を行ったところ、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会施設課と文化課との間で協議が重ねられ、その結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会との委託契約を締結し、行うこととなった。

発掘調査・整理作業は下記のように実施した。

#### 発掘調査（本調査）

期 間 平成12年7月3日～平成12年8月4日

調査部長 沼澤 豊 南部調査事務所長 高田 博

担 当 研究員 高梨友子

作業内容 本調査803m<sup>2</sup>

#### 整理作業

期 間 平成12年8月7日～平成12年8月31日

平成12年10月1日～平成12年10月31日

調査部長 沼澤 豊 南部調査事務所長 高田 博

担 当 研究員 高梨友子

作業内容 出土遺物の水洗・注記～原稿執筆、報告書刊行

### 2 調査の方法と経過（第1・2図）

調査は、第2体育館の用地803m<sup>2</sup>について、全面本調査を行うことになった。排土に関しては工事業者の要望により、遺構覆土以外は埋め戻さず学校外に搬出し処分することになった。湧水に関しては学校側の全面的な協力により、水中ポンプを2台、24時間稼働させることになった。

発掘調査に入るに当たって、取り壊された第2体育館の前に更に別の建物が建っていたことはあらかじめわかっていた。2つの建物の基礎による搅乱が少なくとも調査区の四周、そして内部にかなり入っているだろうということ、表土は客土で、学校建設以前は水田ないし蓮田として利用されていたこと等が学校側の話により既に明らかであった。そのため遺構はほとんど遺存していない可能性もあったが、調査に先立つ文化課の試掘により、調査区北側に溝状の遺構が存在するらしいとの結果を得た。現場は第2体育館の解体工事終了直後、工事の都合で現地表面から約30cm下がったレベルで発掘調査のために引き渡された。

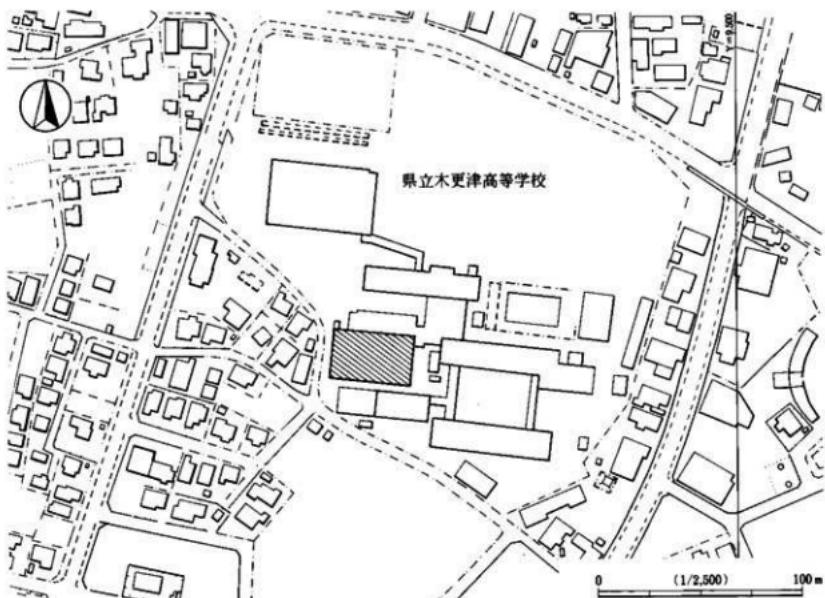
調査は、水の流れとポンプを据える排水施設の位置を常に考えつつ排水溝を掘りながら進めなければな

らず、また、排土搬出のためのルートを確保しなければならなかったので、単純に試掘で遺構が確認された地点から調査を開始するというわけにはいかなかった。さまざまな制約を勘案した結果、表土剥ぎは調査区の北東隅から、北側を西に向かって掘り進み、排水施設を設け、北西隅あたりに排土の山を築きつつ、南側も西に向かって掘り進むということになった。また表土剥ぎを行う過程で、予想どおり調査区の四周が幅4m～5mにわたって攪乱を受けていることが判明したので、その都度その範囲内で自立しない壁を法面にしていくことにした。

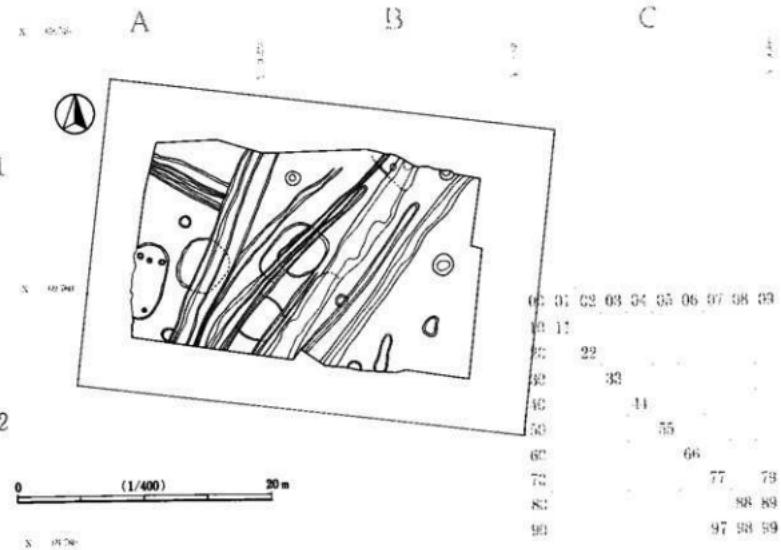
表土剥ぎの終了後、調査区全体に公共座標に基づいて、20m×20mの方眼を被せて大グリッドとし、北から南に1・2、西から東にA・B・Cの記号を付けた。さらに大グリッドの中を2m×2mの小グリッドに100分割し、北西隅から00・01…と付し、南東隅を99にした。地区名は大グリッドもしくは大グリッドと小グリッドを組み合わせることで表示できるようにし、調査を進めていった。

#### 調査日誌抄

7月3日（月） 午後から発掘開始。調査区北東隅から重機（バックホー）で表土を剥ぎ始めるが、80cm位掘ったところで水が湧きだし、井戸状態になる。客土でしかも攪乱を受けている砂質土の壁は、浸食されて次々と崩落していく。段掘りも効かず、壁を緩斜度の法面にして何とか釜場を掘り続け、水中ポンプを据え付けている途中でにわかに雷雨となり、発掘作業は中止となる。調査区で切断され開放している直径20cmの排水管から、学校中の雨水が滝のように流れ込んできた。4日（火）朝、調査区がプールと化していた。エンジンポンプをかけるが、半日近く作業にならない。周囲に排水溝を掘り、釜場に水が流れていくようにしながら表土剥ぎを進めると、調査区北側の中央付近で「遺構面」と思われる面に当たる。5日（水）夜の大雨で、またポンプが砂の中に埋もれていた。釜場の水中ポンプは、半分の高さに切って周りに穴を開けたドラム缶の中に防砂布を巻いて入れることにした。ドラム缶の外側にも防砂布を巻いて据え付け、全体を碎石で覆った。こうすることで泥水が濾過され、ポンプがスムーズに稼働するようになった。調査区壁面の法面は、シートで覆って保護した。表土剥ぎの傍ら「遺構面」を清掃すると、中世陶磁器や弥生土器の破片などが出土した。6日（木）朝、学校側から重機とエンジンポンプの騒音に苦情がくる。10日までの午前中は、期末試験のため完全に重機ストップとなる。人力で表土剥ぎや排水溝掘り等を行ったが、湿地での作業は遅々として進まなかった。7日（金）上陸間近の台風の対策に終始する。8日（土）銚子沖を掠めた台風3号により現場が水没した。学校は休日であったため、2台のポンプが1日中エンジン音を轟かせた。10日（月）調査区北東部の「遺構面」と思われた面で畦畔を検出した。近世～近代のものであり、目指す遺構確認面はまだ下にあることが判明した。11日（火）朝からダンプトラックが出入りし、排土の搬出が始まる。重機で遺構面を目指し、更に全体的に20cm位面を掘り下げた。近世～近代の畦畔の下から土坑（SK-001）や溝などを検出した。第2体育館の前の建物の基礎とみられる松杭が調査区内のあちこちから頭を出したが、バックホーでは取り除くことができなかった。13日（木）中世頃のものとみられる耕作痕を検出した。表土剥ぎは概ね終了したが、排水溝は日々掘り続けていないとすぐ砂で埋まるので、溝掘り用に小型重機を搬入した。14日（金）雨水が調査区内に流れ込まないよう、径20cmの排水管の工事を行う。住居跡（SI-001）を初めて検出した。17日（月）梅雨明け宣言が出る。調査区中央部分に、同方向の溝が何条も切り合っているのを確認した。18日（火）下層を確認するため排水溝の一部を重機で深掘りする。エンジンポンプで泥水を吸い取り、層の境目に



第1図 調査範囲

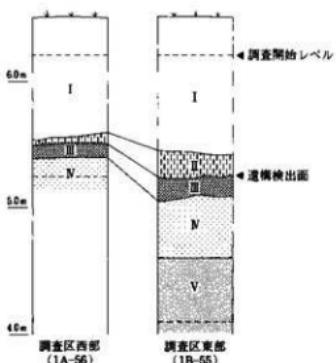


第2図 グリッド設定図

コンベックスを当てて写真を撮ったところで壁が崩落した。19日（水）測量杭打ちをしてもらう。11時半からは終業式を終えた木更津高校の生徒と職員約30人が、現場見学に来る。解説は10分程度で済ませ、後は自由に見学してもらつたが、炎天下にもかかわらず1時間以上も見学していた学生がいた。24日（月）遺構面は同一面と捉えていたが、調査区北側は中世頃と考えられる耕作土が堆積しており、古代以前の遺構面はその下にあることが判明し、重機を再び導入して面を掘り下げた。下からSD-009が検出された。26日（水）現場は雨のため休みとなる。文京公民館で現場見学が予定されていたが、中止となる。8月2日（水）遺構を全て完掘し、校舎の屋上から完掘状況の写真を撮影した。上から見ると、取り残された松杭も何かの遺構のように見えた。3日（木）炎天下、法面のシートとそれを押さえていた600個の土嚢をはずした。シートの下の法面には苔または青カビが生えており、地割れの深い亀裂が上から放射状に入っていた。4日（金）朝から重機による遺構覆土の埋め戻しの傍ら、調査区周辺と側溝の清掃を行う。夕方には無事終了する。

### 3 基本層序（第3図）

現場は湧水が激しいため、土層の堆積状況は排水のための溝を利用して、限られた部分でしか観察することができなかった。東側は1B-55グリッドで、西側は1A-56グリッドで確認を行い、深さは壁が自立する限界までとなった。調査の結果、遺構検出面は西から東、南から北に向かって全体的に傾斜しており、近世～近代、そして中世の各耕作層が調査区内で部分的に入り込むということがわかったが、擾乱部分も多く、現場で調査を進めながらその面的なつながりを見極めるのは、大変難しい状況であった。



第3図 基本層序

I層：表土層であるが客土である。学校建設の直前に盛土されたものと思われる。調査区は工事の都合で現地表面よりも30cmほど下がったレベルで発掘調査に引き渡されたが、失われた部分も同じ層である。

II層：黒褐色砂質土層である。近世～近代の耕作層とみられる。溝や畦畔が検出され、当初中世以前の「遺構面」かと思われた。

III層：褐色砂質土層（部分的に中世の耕作層）である。赤黒い鉄粒を要素に含んでいる。上部ほど色調は赤色がかり、下部はほとんど黄褐色を呈する。2層に分層可能かもしれないが、境界線は判然としない。弥生後期～中世の遺構検出面であり、各遺構はこの層を切って構築されている。部分的に中世の耕作土層となる。

IV層：暗黄褐色砂質土層で、人工遺物は含まれない。

V層：明褐色砂質土層で、人工遺物は含まれない。この層から下の層は湧水が著しく確認できなかった。

## 第2節 遺跡の位置と周辺の環境（第4図）

四房遺跡は、木更津市文京4-1-1、県立木更津高等学校内に位置する。JR木更津駅から直線距離で南東方向に約1kmほど行ったところにある。現在のところ第2体育館の敷地内にしか遺跡は確認されていないが、今回の調査により調査区の四方に広がりを持つと推定される。

この周辺は小櫃川と矢那川の河口域にあたり、広大な沖積平野が海に臨む位置にある。埋立ての進んだ現在でも、四房遺跡からは2kmも西へ向かえば東京湾に出ることができる。沖積平野は水田や蓮田として古くから利用されていたようであるが、四房遺跡の周辺は早くから住宅や建物が建て込み、県立木更津高等学校も平成13年で創立100周年を迎える。

四房遺跡の周辺には、海岸線に平行に數本の砂丘列が形成されており、遺跡の北方では県内有数の河川の小櫃川の作用による自然堤防も形成されている。現在でもこの砂丘列や自然堤防上に住宅などの建物が密集する。四房遺跡が立地するのは海岸から数えて2本目の砂丘列上で、遺跡の標高は約5mである。同一の砂丘列上には、耕作や建物の建築によって失われてしまったものが多くあると考えられるが、比較的大型の前方後円墳ばかりが多く存在する。それらには、金の鈴や銅鏡、15本以上の装飾大刀、甲冑や馬具、大量の須恵器等々後に重要文化財に指定された豪華な遺物を出土し、県指定史跡となっている金鈴塚古墳（4）<sup>11</sup>や、銅鏡、鞍金具の一部、ガラス玉などが出土した塚の腰古墳（6）<sup>12</sup>、金銅製の双魚佩や長さ136cmの環頭大刀などが出土した松面古墳（7）のほか、さかもり塚古墳（5）、稻荷森古墳（8）などがある<sup>13</sup>。

また、海岸から3本目の砂丘列上にも、横穴式石室をもち、銅鈴や金環、9本以上の大刀等を出土した前方後円墳の丸山古墳（3）がある<sup>14</sup>。四宝塚遺跡（2）でも、直径13m、22mとそれぞれ推定される2基の後期円墳が検出されている<sup>15</sup>。遺跡東方の清見台や南東方の諸西の台地上にも大規模な古墳群や横穴群がみられるが、砂丘列上の古墳群ほどに内容の充実したものはない。これらは馬来田国造の系譜を引く首長の墓であると考えられている。銅鏡やガラス玉を出土した前期の前方後方墳である鳥越古墳（10）<sup>16</sup>や中期～後期の前方後円墳である太田山古墳（14）などは、台地上に立地している<sup>17</sup>。

海岸から一番奥に位置する4本目の砂丘列には、永井作貝塚（9）が所在する<sup>18</sup>。県下でも類例の少ない低地性の貝塚で、出土した土器から縄文時代後期に形成されたものと考えられる。検出された貝類や魚骨は海水産のものが主体であるが、淡水産のものも見られる。

最も海に近い砂丘列上には、遺跡は確認されていないようである。

これらのほかの遺跡は、四房遺跡の東側や南側に広がる台地上で多数確認されている。時代を追ってそれらを見てみると、まず旧石器時代は、この周辺ではマミヤク遺跡（29）<sup>19</sup>、大烟台遺跡<sup>20</sup>で石器ブロックが確認されている以外はあまりはっきりしない。

縄文時代は、庚申塚A遺跡（24）で早期の住居跡が<sup>21</sup>、大烟台遺跡（27）で早期の陥穴と前期の住居跡が検出されている<sup>22</sup>。また、マミヤク遺跡でも構造は確認されていないが早期の撲糸文系土器等が確認されている<sup>23</sup>。東隣の砂丘列上に立地する四宝塚遺跡（2）で縄文後期の土器が出土しているが<sup>24</sup>。これは混入したものである可能性が高い。

弥生時代になると、特に後期に至って集落が激増する。マミヤク遺跡（29）や大山台遺跡（26）などでは中期の住居跡も数軒ずつ検出されてはいるものの、後期の住居跡がそれとは比較にならないほど多く調査されている<sup>25</sup>。このほか塚原遺跡（21）<sup>26</sup>などでも多くの後期の住居跡が検出されており、鹿島塚A遺跡（24）



- 1 四房遺跡
- 2 四宝塚遺跡
- 3 丸山古墳
- 4 金鉈塚古墳
- 5 さかもり塚古墳
- 6 塚の腰古墳
- 7 松面古墳
- 8 稲荷森古墳
- 9 永井作貝塚
- 10 鳥越古墳
- 11 清見台古墳群
- 12 森崎遺跡
- 13 宮ノ下遺跡
- 14 太田山古墳
- 15 真船古墳群
- 16 本郷B遺跡
- 17 諸西城跡
- 18 諏訪谷横穴群
- 19 千束台遺跡
- 20 高部古墳群
- 21 塚原遺跡
- 22 横峰遺跡
- 23 大山台古墳群
- 24 庚申塚A遺跡
- 25 鹿島塚遺跡
- 26 大山台遺跡
- 27 大烟台遺跡
- 28 俵ヶ谷遺跡
- 29 マミヤク遺跡
- 30 俵ヶ谷古墳群

第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

では二重の環濠も検出されている<sup>13)</sup>。森崎遺跡も丘陵上に立地し、弥生後期～古墳前期の住居跡が2軒検出されている<sup>14)</sup>。

これらの集落の多くは古墳時代、奈良時代に至っても台地上に連続と営まれている。古墳時代は集落のほか、大型の前方後円墳以外の古墳が数百基単位で台地上に形成されている。

以後、中世には四房遺跡の周辺は耕作関連の遺構が広がるようである。四宝塚遺跡（2）では中世に、墳丘の残る古墳の周りで耕作を行っていた形跡が見られる<sup>15)</sup>。台地の上には、文献では詳細不明であるものの、土壙等の確認されている請西城跡（17）<sup>16)</sup>がある。

注1 滝口 宏ほか 1951 『上総金鈴塚古墳』千葉県教育委員会

2 杉山晋作 1974 「木更津市「塚の腰古墳」出土遺物」『ミュージアムちば』第4号

3 木更津市史編集委員会編 1972 『木更津市史』

4 鈴木良征・宍生 衛・高梨友子 2001 『木更津市四宝塚遺跡』財団法人千葉県文化財センター

5 梶山林蔵 1980 「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』第171号

6 木更津高校内およびその周辺にも古墳があつたらしく、『木更津市史』などでは「四房古墳群」とそれを呼称している。また、新しい住所表示によってそれを「文京古墳群」と称している文献もある。しかしここでは、最近の分布調査の成果に従って「真船古墳群」を掲載し、木更津高校内は四房遺跡のみとした。

7 小沢 洋ほか 1989 『小浜遺跡群II－マミヤク遺跡－』財団法人君津都市文化財センター

8 財団法人君津都市文化財センター 1991 『君津都市文化財センター年報9－平成2年度－』

9 松本 勝 1993 『大烟台遺跡群確認調査報告書II』木更津市教育委員会

井上 賢ほか 1996 『大烟台遺跡群発掘調査報告書I』木更津市教育委員会

10 小沢 洋 1993 『小浜遺跡群V－俵ヶ谷古墳群・マミヤク遺跡－』財団法人君津都市文化財センター

11 豊巻幸正 1990 『請西遺跡群発掘調査報告書II－大山台－』木更津市教育委員会

財団法人君津都市文化財センター 1991 『君津都市文化財センター年報9－平成2年度－』

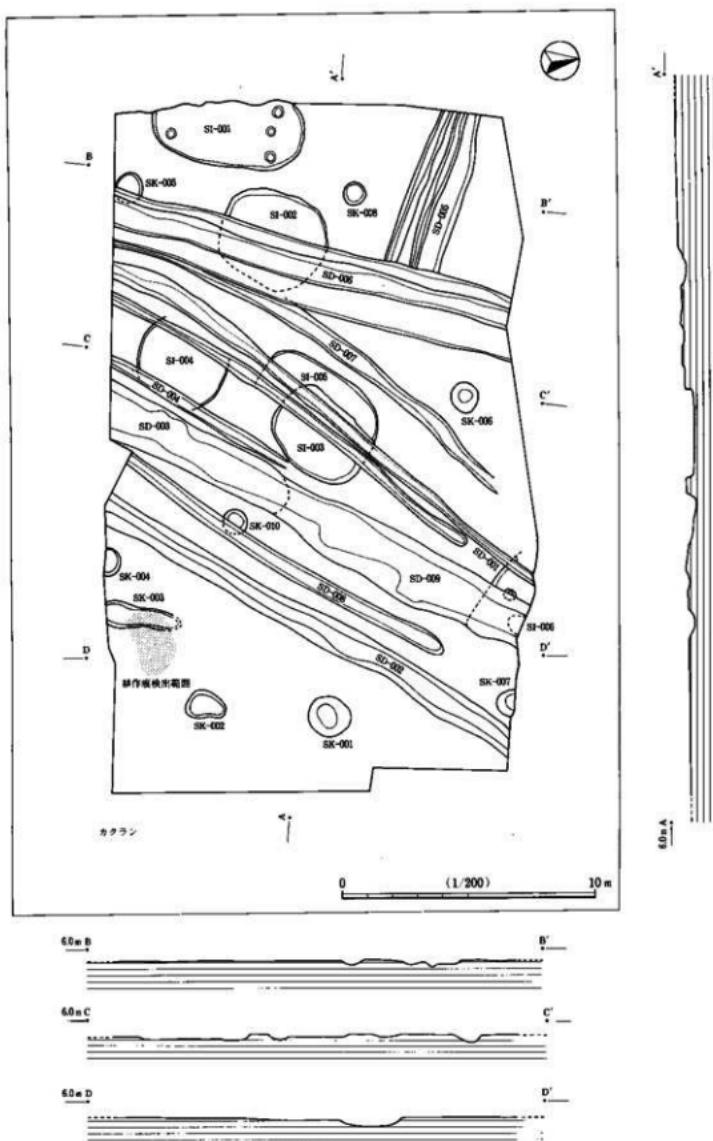
財団法人君津都市文化財センター 1992 『君津都市文化財センター年報10－平成3年度－』

財団法人君津都市文化財センター 1993 『君津都市文化財センター年報11－平成4年度－』

12 大原正義 1985 『塚原遺跡』木更津市教育委員会

13 岡野祐二 1994 『請西遺跡群III－鹿島塚A遺跡－』財団法人君津都市文化財センター

14 財団法人君津都市文化財センター 1993 『君津都市文化財センター年報11－平成4年度－』



第5図 調査区内全測図 (1:200)

## 第2章 検出した遺構と遺物

### 第1節 遺構と出土遺物

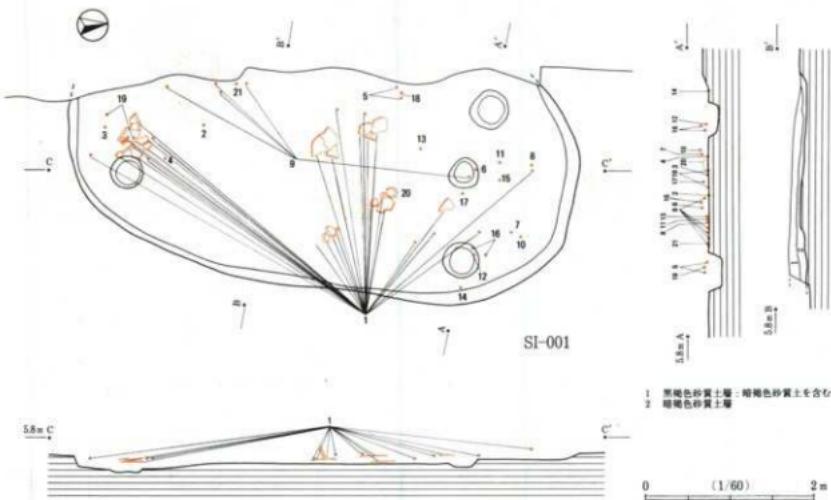
#### 1 壴穴住居跡

住居跡は全部で6軒検出された。重複関係はほとんどなく、いずれも弥生時代後期頃～古墳時代前期頃の所産と考えられる。

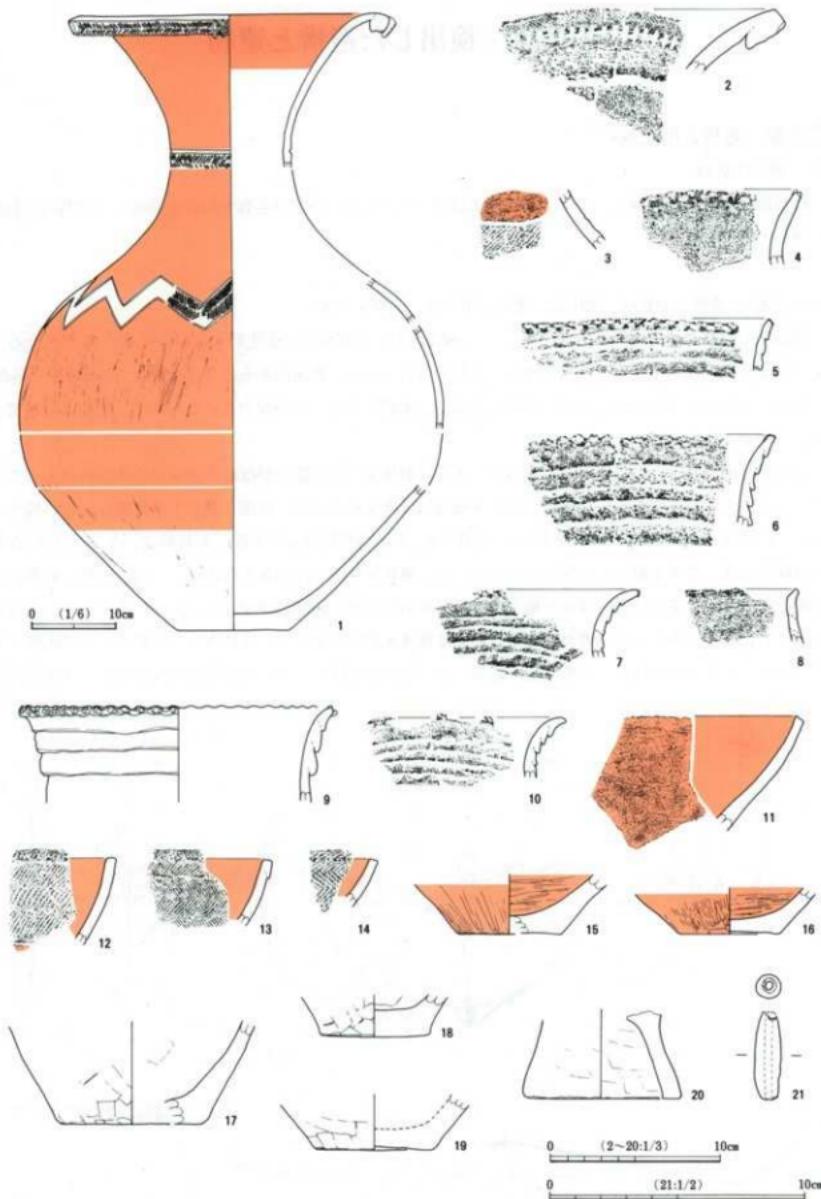
SI-001（遺構：第6図 図版3、遺物：第7図 図版7・8）

調査区の西端、1A-95グリッドを中心として検出された住居跡で、弥生時代後期の所産と考えられる。プランは長楕円形を呈する。西部は擾乱により失われている。検出面からの深さは最大で15cm程度である。砂質土に掘り込まれた床面や壁面は全体に脆弱で、床面からピットが検出されたものの、機能は特定できない。炉も不明である。

遺物は、検出面からの浅さにも関わらず、大きな個体を含む土器片がほぼ床面から全体的に出土している。1は、大型の壺である。口縁部～頸部・底部はほぼ完存するが、肩部～胴部下半は接合しない破片が多い。口径38.0cm、底径13.0cm、胴部最大径50.4cm、復元器高72.0cmを測る。羽状繩文が施される折返しの口縁部には、2本1組の棒状浮文が4単位付く。棒状浮文上には刻みが施されている。頸部と肩部には沈線で区画された部位に羽状繩文を施す文様帶がみられるが、頸部には少なくとも下にもう1本、上部と同様の羽状繩文の帯が巡る考えられる。器面は磨滅・剥落が著しく、特に内面は調整の観察が困難である。胎土には1mm大の白色粒子を多量に含み、この粒子が抜けたものと考えられる穴が器壁に多く見られ



第6図 SI-001

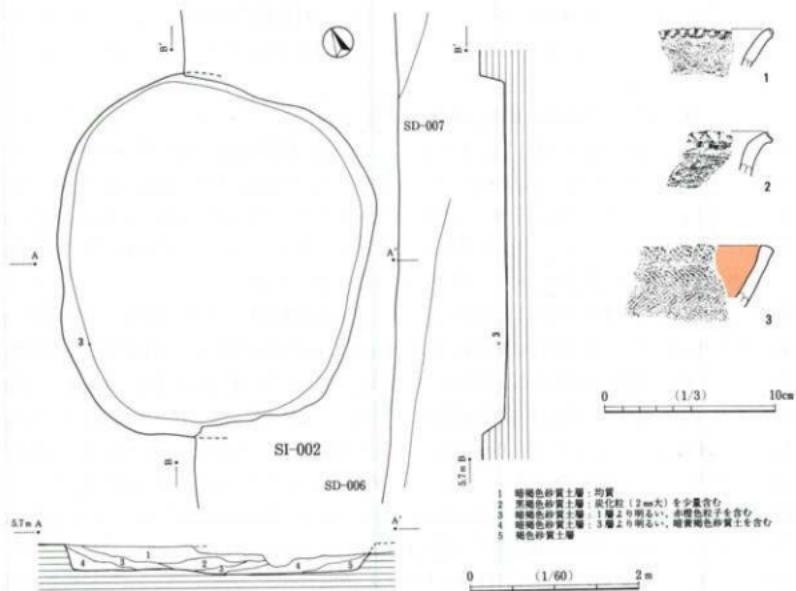


第7図 SI-001出土遺物

る。焼成はやや甘く、赤彩以外の部分は淡褐色を呈する。2・3は壺の破片である。2の口径は、1同様かなり大きくなるとみられる。口唇部には羽状繩文が施され、その上からハケ状工具による刻み列が巡る。砂粒を多く含む。焼成はやや甘く、明褐色を呈する。3は胎土に白色粒子を多量に含んでいる。4～7・9・10は甕の破片である。4・5・7・9の口唇部は正面と上から交互に指もしくは棒状工具の側面で押捺が施されている。6は面取りされた口唇部に内面側から棒状工具の側面などで押捺している。8は小型の甕であろうか。10の口唇部の形状は欠損部が多く明らかでない。11～14は鉢である。11は内外面ミガキで仕上げられる。口唇部は磨耗しているが、繩文ではなく、赤彩されていたとみられる。13の口縁部には輪積み痕が明瞭に残り、折返し口縁風になっている。15は11と同一個体の可能性がある。16は胎土に白色粒子を多量に含む。17の外面はヘラナデの後若干ヘラミガキが入るようである。19の外面は赤彩の可能性があるが、器面が磨耗し明らかでない。内面は著しく剥落している。20は台付甕の脚部である。裾部は水平に面取りされている。21は管状土錘である。長さは3.5cm、幅は1.0cm、重さは2.6gを測る。

#### SI-002（遺構：第8図 図版3、遺物：第8図 図版8）

1A-87・97グリッドを中心として、東半分の上部がSD-006に切られて検出された住居跡と考えられる遺構である。現状では若干四角くなるような不整形を呈するが、本来の形は崩れてしまっている可能性が高い。床面や壁面もしまりがなく、ピットや炉は検出されなかった。



第8図 SI-002と出土遺物

遺物は土器片が少量出土したのみで、図示したものはいずれも覆土からの出土である。1・2は甕である。1の口唇部にはハケ状工具による刺突列が巡る。遺存部下端は、ヨコナデの後縫にハケ調整が入る。ハケの単位は10本/cmである。2の口唇部は、はっきりしないものの刻みの中に縄文があるようである。口縁部の調整は内外面ともヨコナデである。3は鉢である。胎土に白色粒子を多量に含む。

#### S I -003・005 (遺構 : 第9図 図版3, 遺物 : 第9図 図版8)

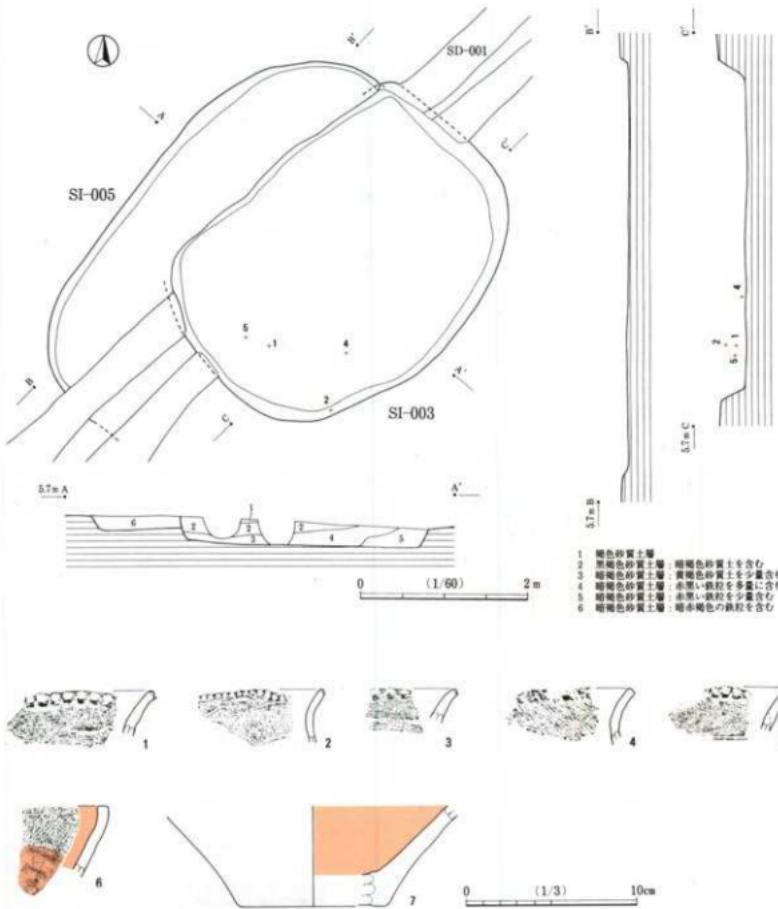
調査区のはば中央、1B-80・81グリッドを中心として、SD-001に切られて重複して検出された2軒の住居跡と考えられる遺構である。土層の観察からS I -005よりS I -003のほうが新しいとみられるが、遺物はどちらも弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が少量出土したのみで、詳しい時期を決定することはできなかった。いずれも近世以降の耕作によって上部が壊されているものと考えられる。床面や壁面はいずれも脆弱で、ピット等は検出されなかった。また、S I -005については、西側以外の壁の立ち上がりが検出できず、耕作によって壊されてしまったのか、或いは溝状の遺構であった可能性もあるかもしれない。

図示した5点の遺物は、いずれもS I -003の覆土から出土したものである。1～5は甕である。1・3・5は口唇部に棒状工具の側面などで施されたとみられる押捺列が巡る。2の口唇部は縄文原体の押捺列とみられる。4は遺存状態が悪く口唇部の形態は不明だが、器面外面には雑なハケ調整が見られる。内面は横方向に施されている。ハケの単位は6本/cmである。5は遺存部下端に輪積み痕が明瞭に残されている。6は鉢である。7は内外面ヘラミガキである。胎土に白色粒子を多量に含む。分厚い底部を有するが、内面は赤彩されており、鉢であるかもしれない。胎土は6と似ている。

#### S I -004 (遺構 : 第10図 図版4, 遺物 : 第10図 図版7・8)

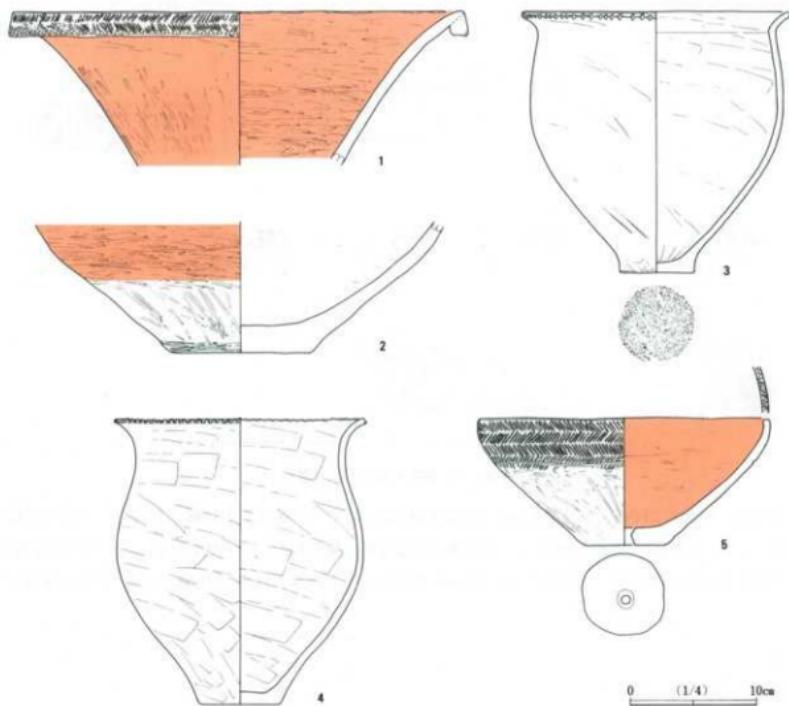
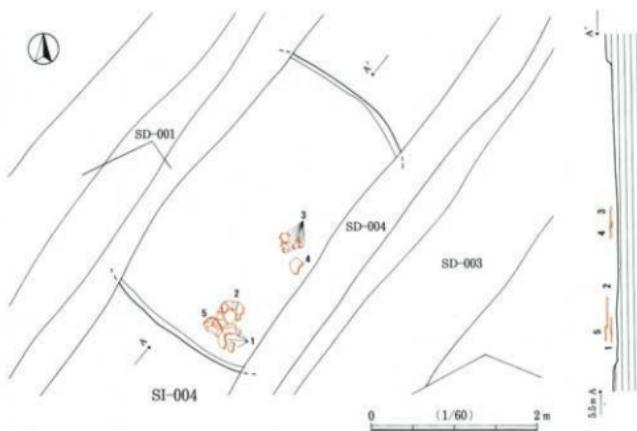
調査区中央部分の近世以降の溝群を掘り下げたところ、SD-001やSD-004などの中世の溝の間から大きな土器がまとまって出土し、2A-09・19グリッドを中心とした位置にS I -004を確認した。確認面がほとんど床面に近い状況で、壁は辛うじて南北方向で検出した。東西方向の壁と、遺構の上部は、後世の溝などによって失われている。プランは椭円形ないし卵形を呈するようで、弥生時代後期の住居跡と考えられるが、床面も壁面も脆弱で、ピット等も検出することはできなかった。

遺物は、検出面からの深さが浅いにも関わらず、覆土あるいは床面から多く出土した。1は大型の壺で、口縁の40%程度遺存する。復元口径は36.0cm、現存器高は12.1cmを測る。折返しの口縁部には羽状縄文が施され、上から恐らく縄文原体によるとみられる押捺列が巡っている。胎土には1mm～2mm大の白色粒子を含み、焼成は普通である。棒状浮文の有無は確認できない。2は大型の壺の底部とみられる。底部のみがほぼ完全に遺存している。底径は11.0cm、現存器高は10.4cmである。胎土に白色粒子を含み、焼成は普通であるが、内面がかなり磨滅・剥落している。1と同一個体の可能性がある。3・4は甕である。3は全体の70%程度の遺存度である。復元口径は21.0cm、底径は6.0cm、器高は20.5cmである。口唇部には棒状工具の端部などによる鋭い刻みの列が巡る。調整は内外面とも全体的にヘラナデで仕上げられており、底部外面には明瞭に木葉痕が残る。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。4は全体の80%遺存している。口唇部は正面と上部から指頭なし棒状工具の端部で押捺されている。内外面ともヘラナデで、外面には煤が付着している。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。5は鉢である。全体の70%程度の遺



第9図 SI-003・005と出土遺物

存度である。口径は23.0cm、底径は6.4cm、器高は10.0cmである。口縁部に羽状繩文を施し、下端を沈線で区画している。口唇部にも繩文を施す。外面無文部は赤彩が施されていた可能性が高いが、明らかでない。底部には内外面から焼成後穿孔が行われ、瓶に転用されたものとみられる。内面は著しく磨滅・剥落している。

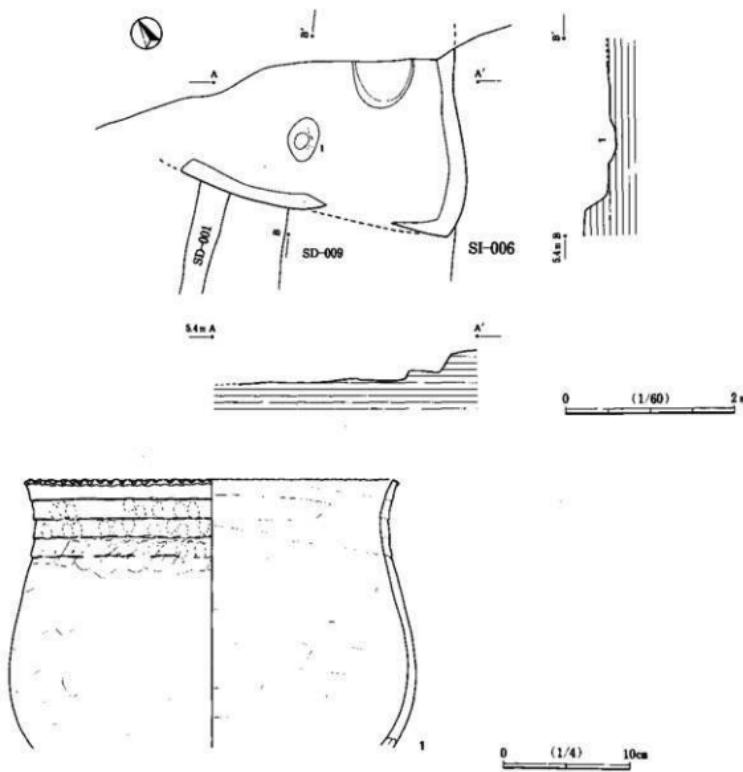


第10図 SI-004と出土遺物

S I -006 (遺構 : 第11図 図版4, 遺物 : 第11図 図版7)

1B-55グリッドを中心としたSD-009の底面から、ピットを伴って土器の大きな破片が出土し、確認された住居跡である。調査区内で最も湧水の激しい地点に位置しており、常に床上を水が流れている状況で、床面や壁面の検出作業は困難を極めた。結果として床面は明確な面としては残存しないようだが、同一層の面が捉えられたので床面とした。壁は一部SD-009と重複するようであり、またコーナーと思われる部分も見られたが、ほとんど建物の基礎とSD-001・009に切られているので全体のプランは明らかでない。ピットは2か所検出され、そのうちの1か所には土器片(第11図1)が埋まっていた。いずれも機能は明らかにならない。弥生時代後期の住居跡と考えられる。

遺物は図示したもののはかはほとんど出土していない。1は壺である。口縁の40%程度の遺存度である。復元口径は29.6cm、現存器高は21.2cmである。口唇部は上から指頭で押捺している。胴部は内外面ともケズリに近いヘラナデである。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。



第11図 SI-006と出土遺物

## 2 土坑

土坑は全部で9基検出された。調査順にSK-001~010の番号を付したが、このうちSK-009は、最終的に木根跡と判明し、欠番とした。

### SK-001（遺構：第12図 図版5、遺物：第14図 図版7）

1B-86・87・96・97グリッドで検出された。1層を掘り込んだところから激しく水が湧き出した。井戸状の土坑と考えられる。遺物は覆土中から土師器の底部（第14図1）が出土した以外はほとんど認められない。

1は底部の40%程度の遺存度である。外面はヘラナデないし擦痕状の調整とみられる。内面はヘラナデあるいはハケ調整かもしれない。

### SK-002（遺構：第12図 図版5）

2B-16グリッドで検出された。不整形を呈し、確認面からの深さはごく浅い。覆土は中世頃の耕作土とみられる暗褐色砂質土の單一層である。機能・時期等は明らかにならない。

遺物は出土していない。

### SK-003（遺構：第12図 図版5、遺物：第14図 図版8）

2B-14・24・34グリッドで検出された。南側は建物の攪乱に切られる。北側は調査のためのサブレンチにより失われているが、トレンチの範囲内で終結するとみられる。平面形は溝状を呈し確認面からの深さはごく浅い。この周辺で検出された耕作痕がこの遺構の内部でも一部確認できたため、中世以前の所産と考えられるが、機能等は不明である。

遺物は覆土中からごく少量の土器片が出土したのみで、1点のみ図示した。1は壺の破片である。口唇部には正面と上から交互に刻みが入る。遺存部端部に明瞭に輪積み痕を残す。

### SK-004（遺構：第12図 図版5、遺物：第14図 図版8）

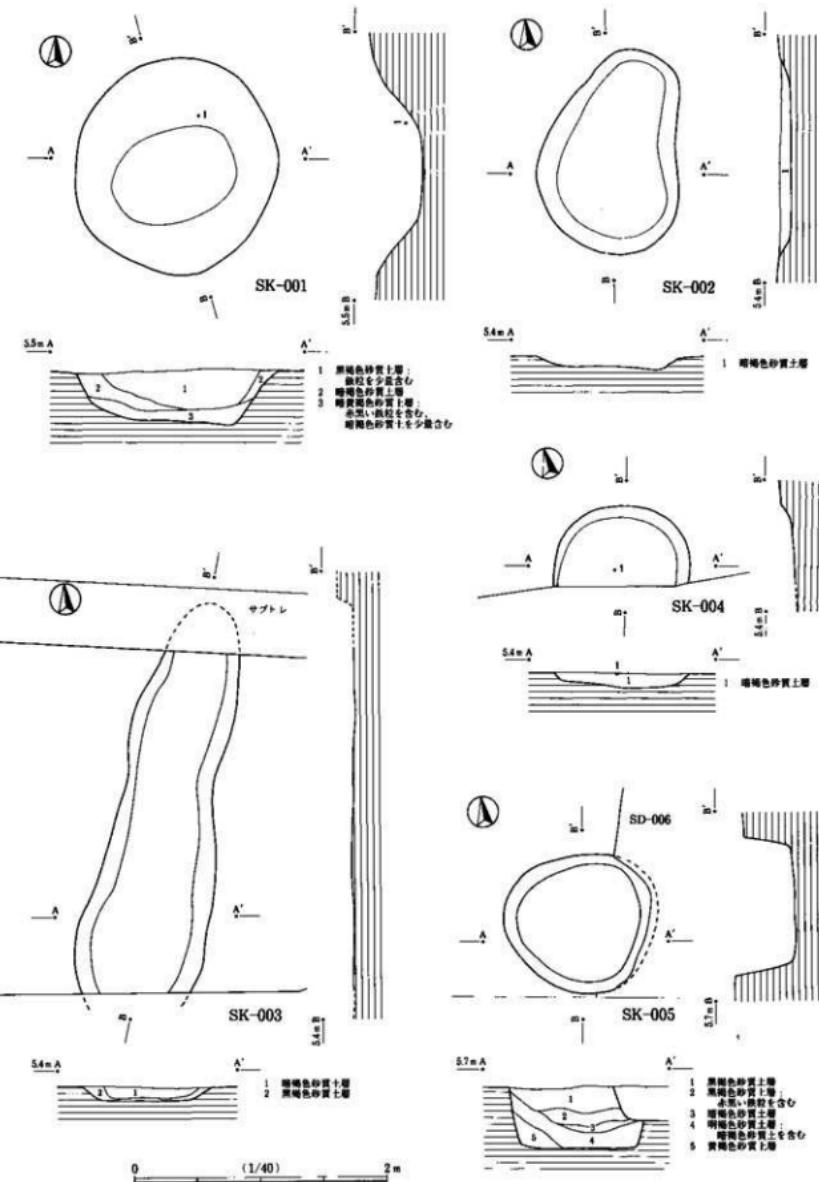
2B-23グリッドで検出された。南側は建物の攪乱により失われているが、円形を呈するようである。確認面からの深さはごく浅く、覆土は中世頃の耕作土とみられる暗褐色砂質土の單一層である。機能等は明らかでない。遺物はほとんど確認面に近いところから第14図1が出土したのみである。

1は大型の壺の胴部片とみられる。器面は磨耗しているが、外面に赤彩が観察される。胎土に白色粒子を含み、焼成はやや甘い。

### SK-005（遺構：第12図 図版5）

2A-15・16グリッドで検出された。東側の上部はSD-006に切られる。平面形は円形を呈する。湧水が激しく、底面を追って掘り下げるところではオーバーハングして崩れるほどである。井戸状の土坑であろうか。

遺物は覆土中から弥生土器ないし土師器とみられる破片が出土したが、時期の決定はできなかった。



第12図 SK-001・002・003・004・005

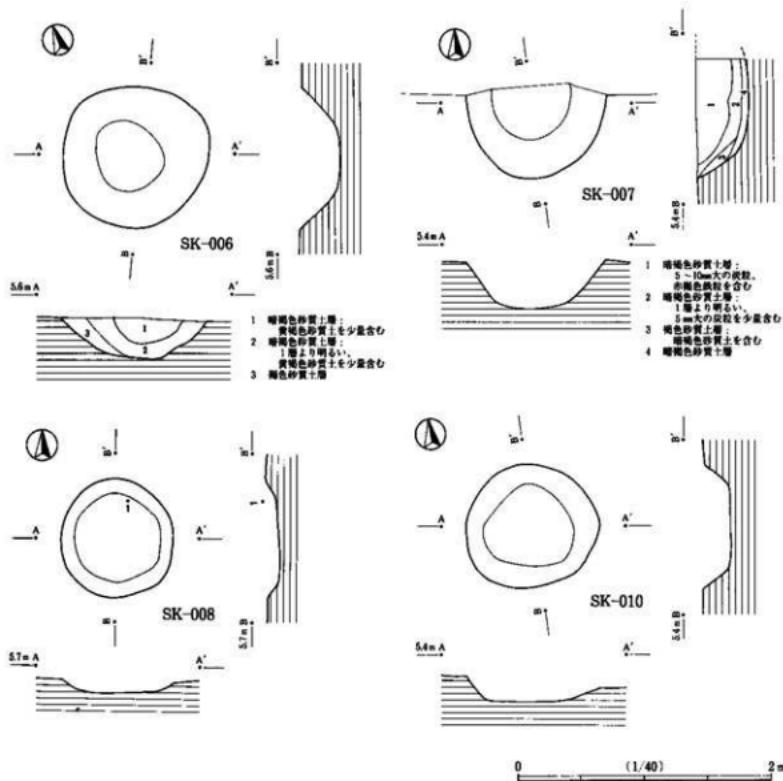
SK-006 (遺構 : 第13図 図版5)

1B-50・51グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、断面形は擂鉢状である。機能は明らかでない。遺物は覆土から弥生土器ないし土師器とみられる破片が出土したが、時期の決定はできなかった。

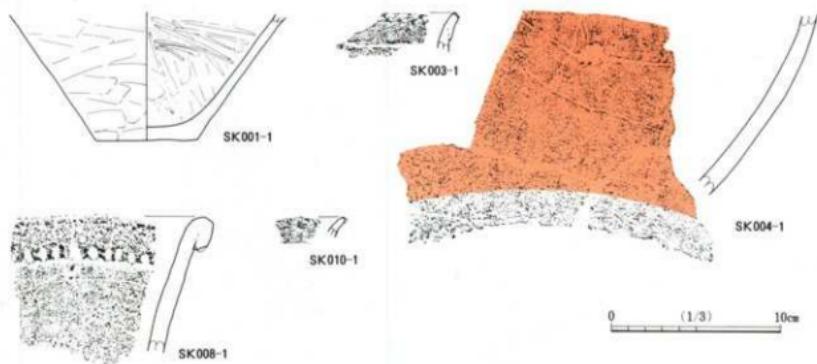
SK-007 (遺構 : 第13図 図版5)

1B-56・57グリッドで検出された。北側は建物の擾乱により失われているが、円形を呈するようである。断面は擂鉢状とみられる。調査区内でも湧水の激しい地点に位置しており、井戸状の土坑と考えることもできるが、時期ははっきりしない。

遺物は出土していない。



第13図 SK-006・007・008・010



第14図 土坑出土遺物

SK-008（遺構：第13図 図版5、遺物：第14図 図版8）

1A-76グリッドで検出された。平面形は円形を呈する。確認面からの深さはごく浅い。機能は明らかでない。

遺物はほとんど確認面に近いところから、少量出土したのみである。

1はあまり口縁部が開かない器形の壺と考えられる。器面はかなり磨耗し詳細は不明であるが、口唇部には繩文が、折返しの口縁部外面には羽状繩文が施されていたようである。内面と外面の無文部は赤彩が施されていた可能性もあるが、明らかでない。胎土に白色粒子を含み、焼成はやや甘い。

SK-010（遺構：第13図 図版6、遺物：第14図 図版8）

2B-02グリッドで検出された。東側の上部はSD-008に切られているが、平面形は円形を呈する。機能や時期ははっきりしない。

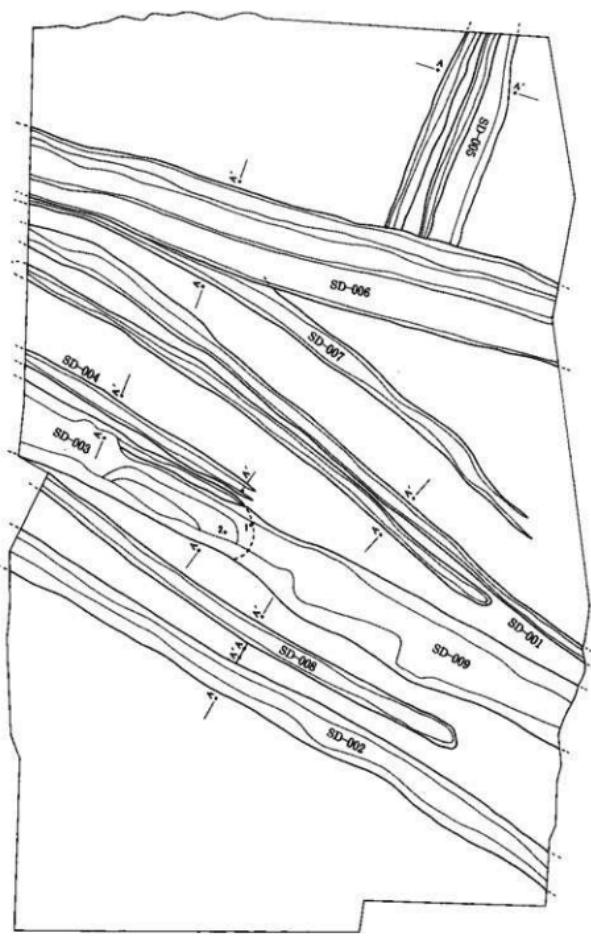
1は甕の破片である。口唇部は内面側と外面側から交互に押捺されている。遺存部の調整はヨコナデである。

### 3 溝状遺構

SD-001（遺構：第15図）

調査区の中央を南北に走る、新旧関係のはっきりしない2本の細い溝である。層位的に中世頃の所産と考えられる。近世～近代の面の同じ場所には、道路状遺構に伴って側溝と耕作層が検出されており、その前身となる遺構の可能性がある。

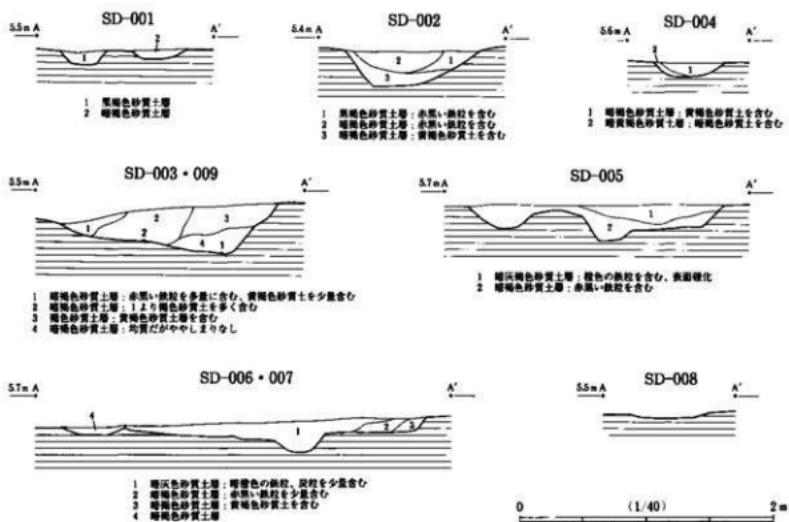
遺物はほとんど出土していない。図示できたのは1点のみである。1は比較的大型の壺の底部と思われる。外面はヘラミガキ、内面はナデで、外面は赤彩が施されていた可能性もあるが不明である。胎土に白色粒子を多く含む。焼成はやや甘い。



カクラン

0 (1/150) 5m

第15図 溝状遺構全体図



第16図 溝状遺構土層断面図

SD-002（遺構：第15図 図版6、遺物：第17図 図版8）

調査区内ではば並行に検出された溝状遺構の中で、もっとも東側に位置する遺構である。検出面の上には中世頃とみられる耕作痕を伴う耕作層が堆積していることや、覆土中から出土した遺物が弥生時代後期～古墳時代前期頃のものにはば限られることなどから、弥生時代後期～古墳時代前期頃の所産と考えられる。機能等は明らかでないが、同時期とみられる住居跡群がこの溝より東では検出されていないことから、居住区の区画溝と考えることもできるかもしれない。

1は壺の肩部の破片と思われる。沈線で区画を行った後羽状繩文を施す。2は甕の破片である。口唇部は正面と上面から交互に指頭ないし棒状工具による押捺が加えられている。

SD-003・009（遺構：第15図 図版6、遺物：第17図 図版8）

SD-003と009は平面的にはほぼ同じ場所に位置するが、SD-009の北側は上に耕作土とみられる土層が堆積し、SD-003の確認面では平面的に検出することはできなかった。また、調査区の北端でSD-009の下からS I-006が検出されている。いずれも機能等ははっきりしないが、SD-003は中世頃、SD-009は古墳時代～古代の所産と考えられる。

SD-003出土として図示した遺物のうち、1・2は平面的位置から判断したもので、底面からの出土であることを考慮するとSD-009に伴う可能性が高い。SD-003の1は縄文時代後期の粗製深鉢と考えられる。大粒の縄文を地文とし、横位の沈線が施される。口縁部の隆面上は指頭による押捺列である。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。2は外面はヘラミガキ調整で、赤彩が施されていたかもしれないが不明である。胎土に白色粒子を多く含む。焼成は良好である。SD-009の1は瀬戸・美濃産の筒形

香炉である。表面は風化が著しくほとんど剥落しているが、鉄軸があったとみられる。淡褐色を呈する。14世紀前半～15世紀前半の所産と考えられる<sup>1)</sup>。

#### SD-004（遺構：第15図 図版6）

調査区のはば中央部の南側で検出された浅い溝である。近世以降の耕作によって上部が壊されていると考えられる。層位的には中世頃の所産と考えられるが、機能等は明らかでない。  
遺物は出土していない。

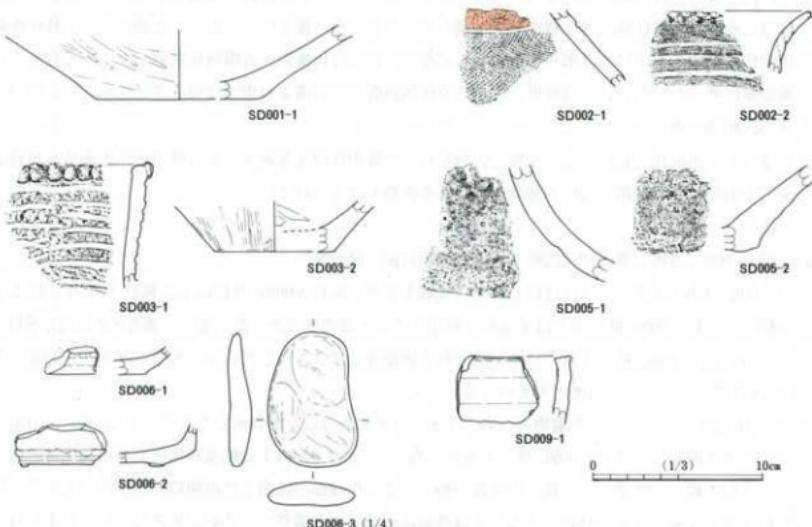
#### SD-005（遺構：第15図 図版6、遺物：第17図 図版8）

調査区内で検出された、唯一主軸方向の異なる溝状遺構である。硬化面がみられ、道路として機能していた可能性が高い。出土遺物から、中世の所産と考えられる。

1は常滑産の大甕の頸部～肩部の破片である。図の上部を中心にはば全体に灰釉がかかる。断面は暗灰色、内面は暗赤褐色を呈する。14世紀後半～15世紀前半頃の所産と考えられる。2は、常滑産の片口鉢である。器面の風化が著しいが、断面は淡褐色、内外面は暗赤褐色を呈する。14世紀前半～15世紀前半の所産と考えられる。

#### SD-006（遺構：第15図、遺物：第17図 図版8）

検出面からの深さがごく浅い、幅広の溝状遺構である。SD-005と覆土が似ており、一部硬化面もみられたことから、同時に機能していた可能性が高い。



第17図 溝状遺構出土遺物

1は瀬戸・美濃産の縁釉小皿である。断面は灰白色を呈する。15世紀中葉頃の所産と考えられる。2は瀬戸・美濃産の筒形香炉である。外面遺存部上半に灰釉が見られる。断面は灰白色を呈する。14世紀前半～15世紀前半頃の所産と考えられる。3は扁平な碟で、表裏面に擦痕が見られる。

#### SD-007（遺構：第15図）

確認面からの深さが浅く、SD-006との関係ははっきりしないが、SD-006より若干古くなるものとみられる。

遺物は、覆土から弥生土器と思われる破片が少量出土したが、図示には至らなかった。

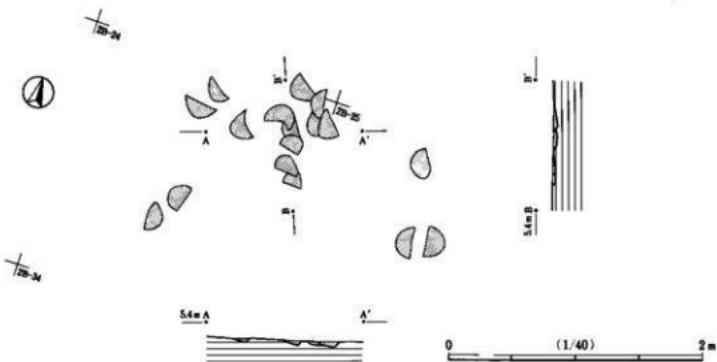
#### SD-008（遺構：第15図）

確認面からの深さがごく浅く、機能等は明らかにならない。層位的に中世頃の所産と考えられるが、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。

#### 4 耕作痕（第18図 図版6）

2B-24・25グリッドを中心として、遺構検出面で耕作の痕跡と考えられる鋤先痕が検出された。それらは半月形ないし三日月形を呈し、方向には統一性はみられない。このような耕作痕は調査区内ではこの一角でしか検出されなかつたが、この面の直上には、耕作土と思われる褐色砂質土を斑に含む暗褐色砂質土が堆積しており、検出面がその鋤床面であったと考えられる。耕作痕内の覆土も同様の土である。この耕作土と思われる土は2Bグリッドを中心に調査区の東側に主に分布しており、層位的に中世頃の所産と考えられる。その他の地区では、これと質の異なる、これよりも新しい耕作土が遺構確認面をかなり削平してその直上に広く堆積しており、この土層を確認することはできなかった。検出された溝状遺構のどれかがこの耕作の区画に関わる可能性もあるが、現時点では調査区内ではその関係は明らかでなく、この耕作がどのような平面的な広がりをもって、どんな作物のために行われていたのかは不明である。



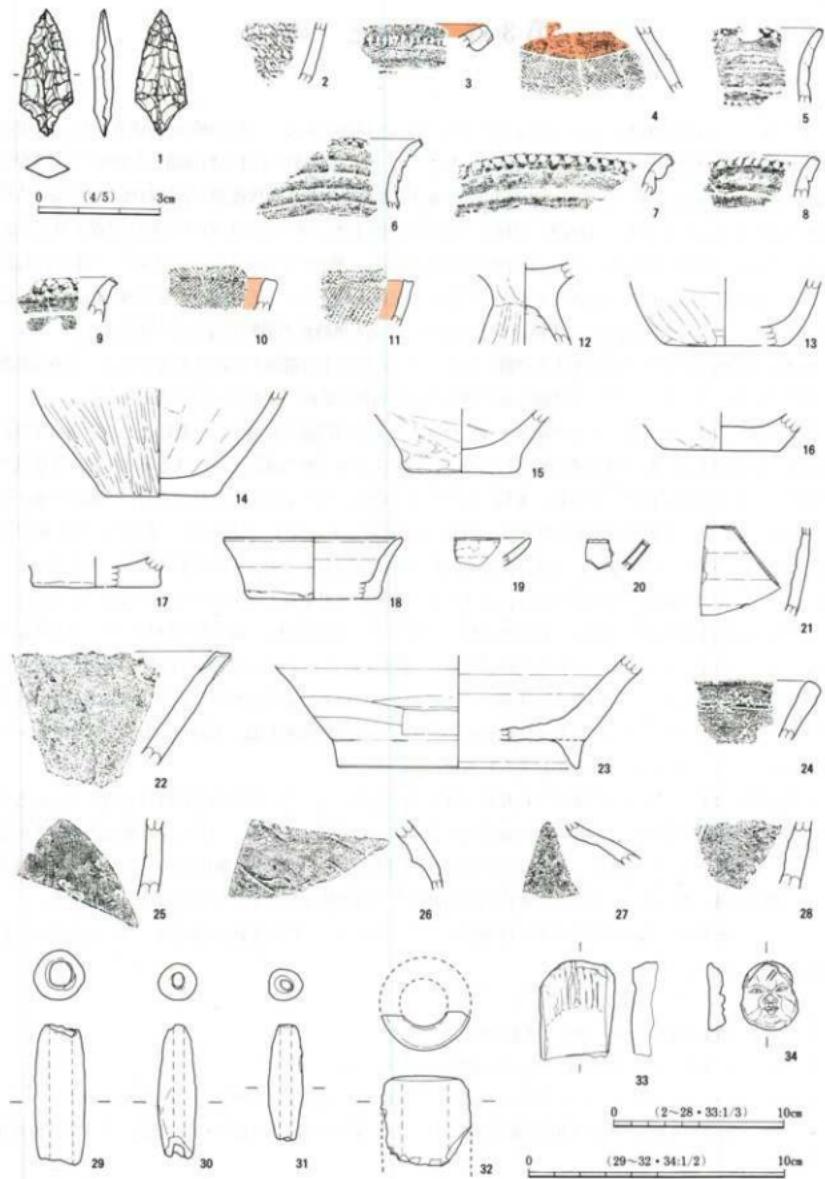
第18図 耕作痕

## 第2節 遺構外出土遺物（第19図 図版9）

調査に伴って、遺構外から出土した遺物をまとめて掲載する。1は2B-11グリッド、4は1A-98グリッド、9は1A-65グリッド、13は1A-98グリッドで出土したものである。2・3・5～12・14・15～34は表採である。

1は、チャート製の有茎石鑿である。折損は見られない。中世の耕作土とみられる土層中から出土した。縄文時代後期のものと考えられる。2は縄文のみが施された土器片で、縄文時代後期のものとみられる。3・4は弥生時代壺の破片である。3は折返しの口唇部に縄文が施され、刻み列が巡る。4の文様は、沈線で区画した後、羽状縄文を施している。器面は磨滅・剥落している。5～9は弥生時代壺の破片である。5・6・9の口唇部は内面側と外面側から交互に刺突が繰り返されている。5の遺存部下端部には極細の円形竹管の端部が押捺されている。7の口唇部は上部からの刺突ないし押捺列である。8の口唇部は縄文原体の押捺である。10・11は弥生時代の鉢である。いずれも内面が赤彩されている。12は高杯の脚部である。器面が磨耗して明らかではないが外面と杯部の内面は赤彩の可能性がある。13は若干器面が磨耗しているが外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデとみられる。14は底部がほぼ全部遺存する。内面は磨滅しているが調整はヘラナデとみられる。胎土に砂粒を少量含み、焼成は普通である。15は底部の50%程度遺存する。胎土に砂粒・雲母を少量含む。16は底部の70%程度遺存する。胎土に砂粒・白色粒子を含む。内面は若干磨減している。17は底部の50%の遺存度である。器面、特に内面の磨減が著しい。18は口縁の20%程度の遺存である。ロクロ調整で、底部外面には回転糸切り痕が見られる。19は瀬戸・美濃産の縁釉小皿である。断面は灰白色を呈する。14世紀後半～15世紀前半の所産と考えられる。20は龍泉窯系青磁の碗である。中世の所産と考えられるが、詳しい時期決定は不可能である。21は瀬戸・美濃産の瓶子ないし四耳壺、あるいは三耳壺とみられる。外面には全面的に灰釉がかかる。断面は灰白色を呈す。14世紀後半～15世紀前半の所産と考えられる。22・24は常滑産の片口鉢である。22は片口の部分が欠損している。暗灰色を呈する。14世紀前半の所産と考えられる。24は灰色を呈する。13世紀後半の所産と考えられる。23は常滑産の片口鉢ないし捏鉢である。高台の下端と底部内面の磨減が著しい。灰色を呈する。13世紀前半の所産と考えられる。25は甕で、12世紀頃の渥美産である可能性が高い。色調は灰色だが、若干褐色がかっている。26は甕で、外面に全体的に灰釉が見られる。須恵器の可能性がある。27・28は常滑産の大甕で、27の外面には灰釉がかかる。いずれも断面は赤褐色で、中世の所産とみられるが詳細は明らかにならない。29～32は管状土錘である。29～31は若干の折損はみられるもののほぼ完全な状態である。29は長さ5.5cm、幅2.0cm、重さ16.2gを測る。30は長さ5.2cm、幅1.5cm、重さ8.1gを測る。31は長さ4.5cm、幅1.3cm、重さ5.4gを測る。32の幅は3.5cmである。33は砥石である。図の下部は折損している。表面に刃を研いだ痕とみられる鋭い溝が、幾条も観察される。裏面は鉄分が付着したように黒ずみ、割れ口と思われるが、あるいはもともとの面か節理面のようなものであるのかもしれない。34は泥面子である。型押しで作られている。

注1 中世の陶磁器の年代については、中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社を参考とした。



第19図 遺構外出土遺物

### 第3章 まとめ

四房遺跡は、今回の調査によって初めて明らかになった遺跡である。今回の803㎡の調査では、後世の耕作による削平や建物による攪乱部分は多かったものの、住居跡6軒（弥生時代後期～古墳時代前期3軒・時期不明3軒）、土坑9基（いずれも時期不明）、溝状遺構9条（弥生時代後期～古墳時代前期1条・古墳時代～古代1条・中世7条）、耕作痕（中世）などが検出された。そしてそれらの分布は調査区外に広がるようである。『木更津市史』では、明治33年の高校建設時、敷地内から石櫛が出たという『君津郡々誌』の記事を引用し、この付近には古墳があったらしいと記載されている。そしてそれを「四房の古墳群」と称している<sup>1)</sup>が、今回の調査では古墳は検出されず、また古墳時代の遺物もほとんど出土しなかった。

本遺跡は低地の砂丘列上に立地する遺跡として、周辺の台地上の遺跡との関連を考える上で重要な位置を占めていると言える。そこで本遺跡を含む周辺の土地利用と景観の変遷について若干考察してみたい。

弥生時代後期は、例えばマミヤク遺跡・大山台遺跡などこの周辺の台地上で中期に比して急激に集落が展開する時期である。特に東京湾に面した台地上に立地するマミヤク遺跡では、弥生時代中期の住居はごく少数でしかも立地は高所に限られ、後期になると標高の低い方にも広がりを見せるという傾向が捉えられている<sup>2)</sup>。一方、本遺跡や四宝塚遺跡<sup>3)</sup>、金鈴塚古墳の墳丘下の調査<sup>4)</sup>などでは、脆弱な砂地に掘り込まれた住居跡が検出されている。つまり、弥生時代中期には台地上でも高所に少数の人々が住んでいたのが、後期に至ると万遍なく集落が広がり、あまつさえ低地に進出する人々もいたという傾向が窺えよう。

四宝塚遺跡の調査成果によると、四宝塚遺跡の立地している砂丘列は、縄文時代晚期～弥生時代中期に形成されたと推定されている<sup>5)</sup>。また、東京湾から一番奥の砂丘列上には縄文時代後期に形成された永井作貝塚がある。このようなことから、本遺跡の立地する砂丘列もあり間をおかないで形成されたと考えができるだろう。そしてこれらの砂丘列が安定した弥生時代後期頃、水回りの有利な低地の人々が進出してきたということが言えるのかもしれない。

古墳時代になると、台地上に集落と大規模な群集墳が造られる一方、砂丘列上には首長墓とみられる大型前方後円墳が築かれる。金鈴塚古墳の例などを見ると、墳丘は粘土を敷きつめた上に周辺の砂質土を盛り上げて築かれており<sup>6)</sup>、恐らく当時も多かれ少なかれ掘れば水が湧き出す環境であったとするとそれぞれの古墳は周溝に水を湛え、あたかも畿内の古墳群のような景観を呈していたのではないだろうか。

しかしながらそのような景観は中世には廃れてしまったらしく、四房遺跡の周辺は一変して耕作の行われる土地となっていた様子が窺える。

注 1 木更津市史編集委員会編 1972 『木更津市史』

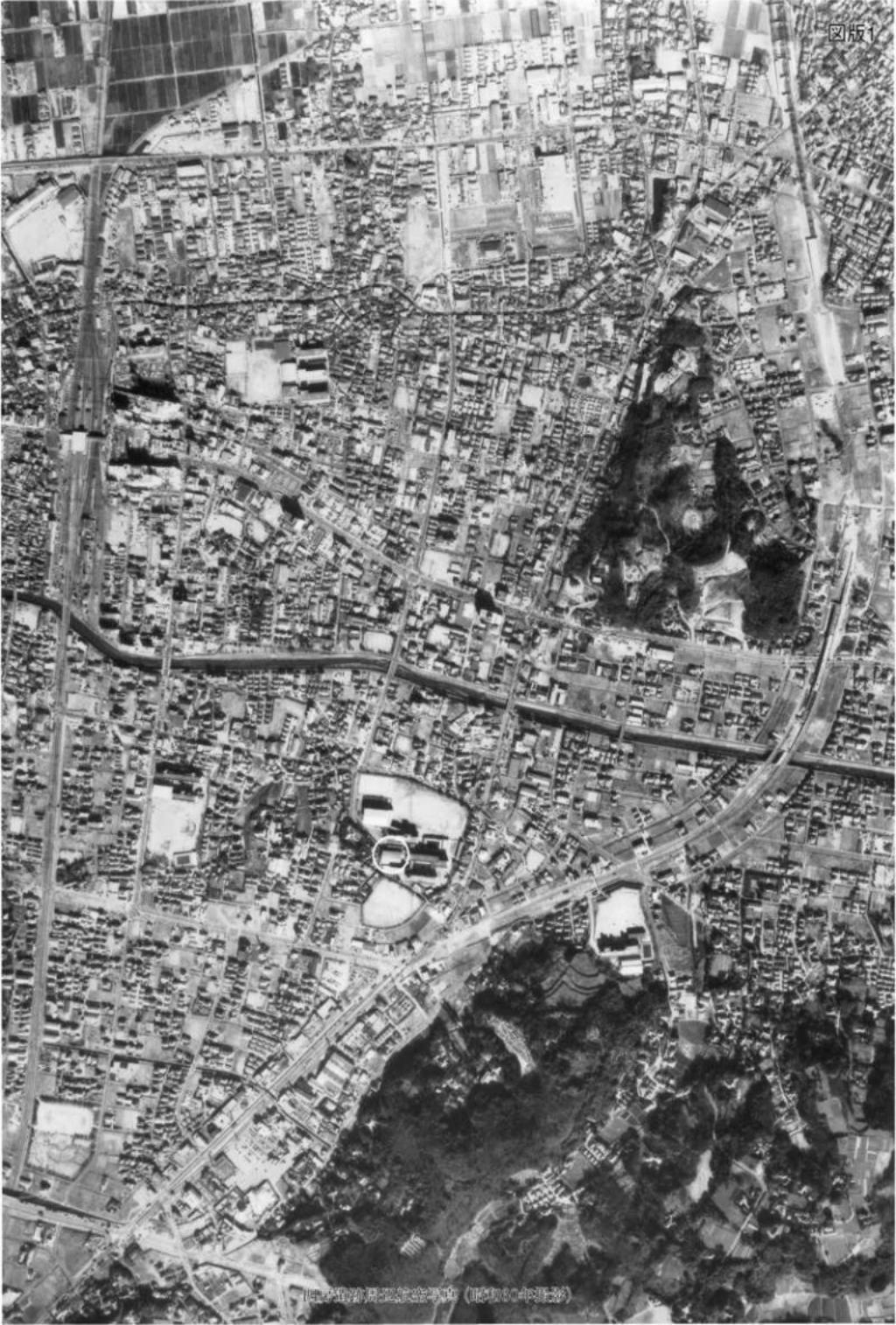
2 小沢 洋 1993 『小浜遺跡群V－俵ヶ谷古墳群・マミヤク遺跡－』

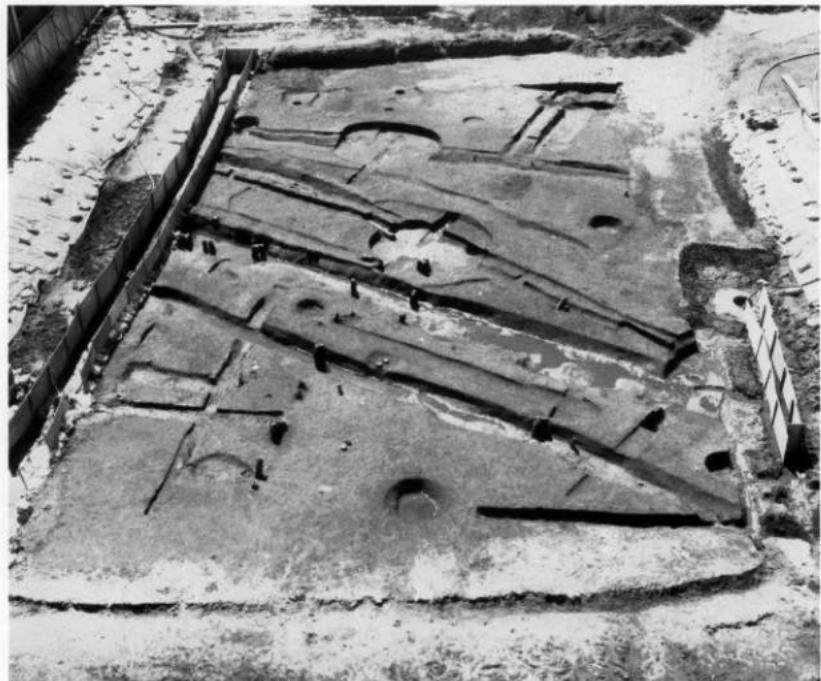
3 鈴木良征・篠生 衛・高梨友子 2001 『木更津市四宝塚遺跡』財団法人千葉県文化財センター

4 安藤道由ほか 1999 『木更津市内遺跡発掘調査報告書—金鈴塚古墳・椿古墳群・松山遺跡—』木更津市教育委員会

5 滝口 宏ほか 1951 『上総金鈴塚古墳』千葉県教育委員会

# 写 真 図 版





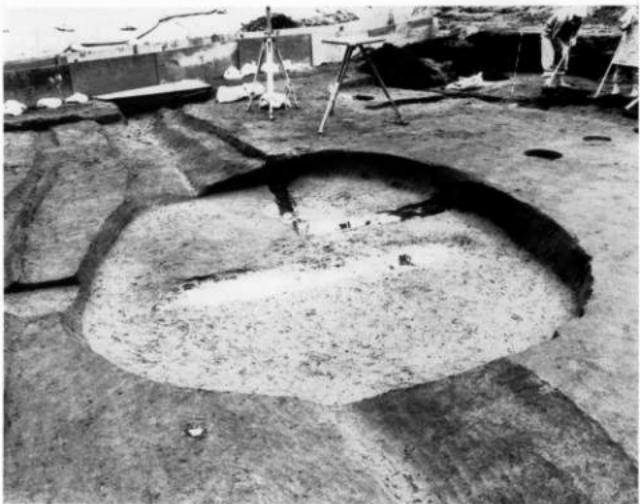
調査区完掘状況（東から）



調査区全景（北西から）



SI-001



SI-002



SI-003-005



SI-004 遺物出土状況

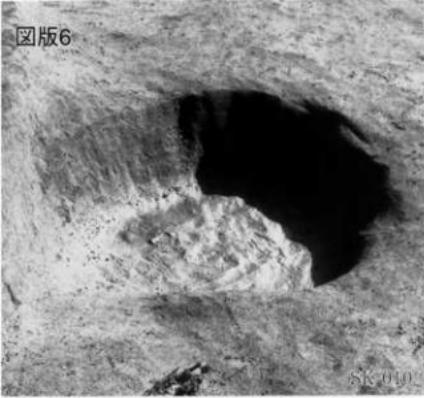


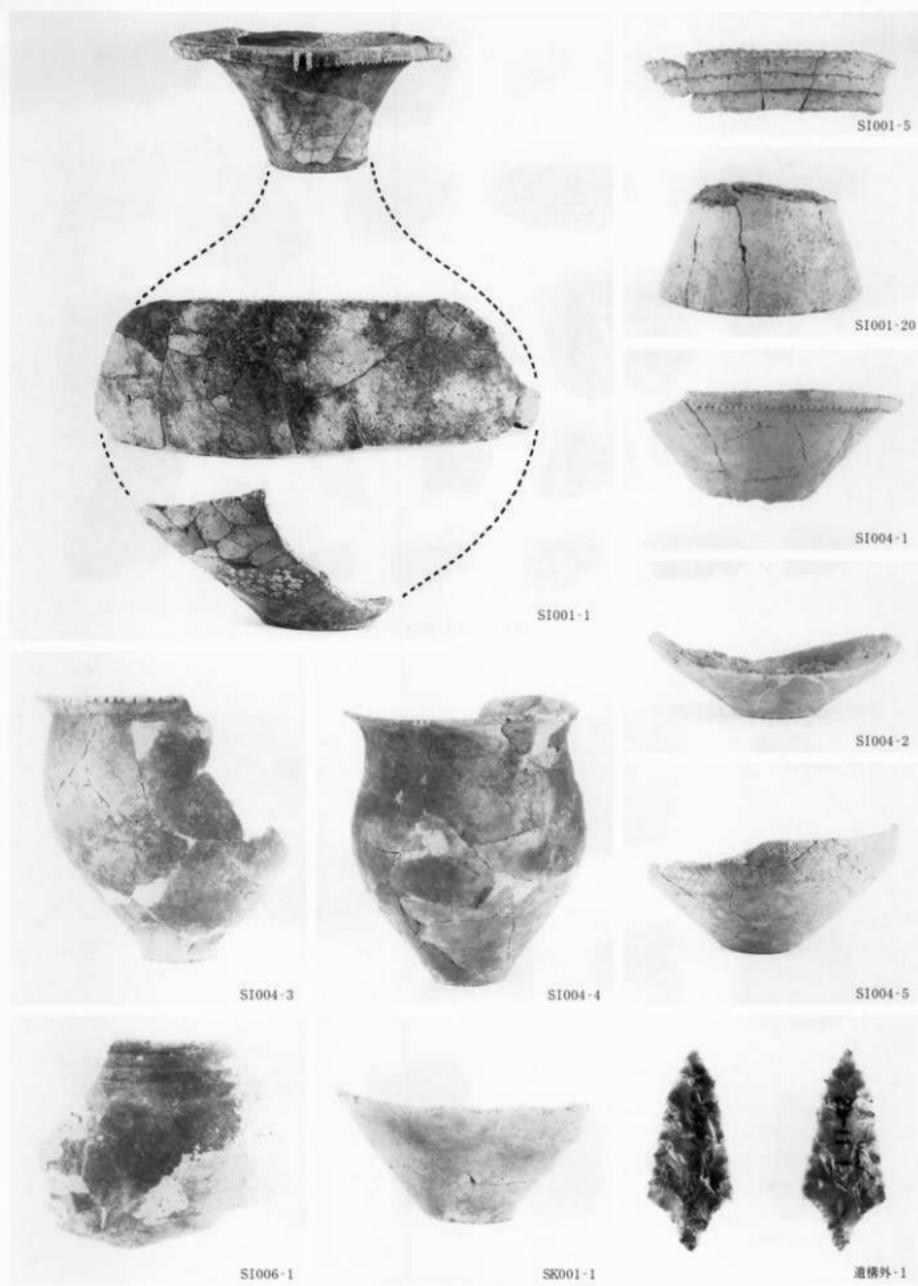
SI-004



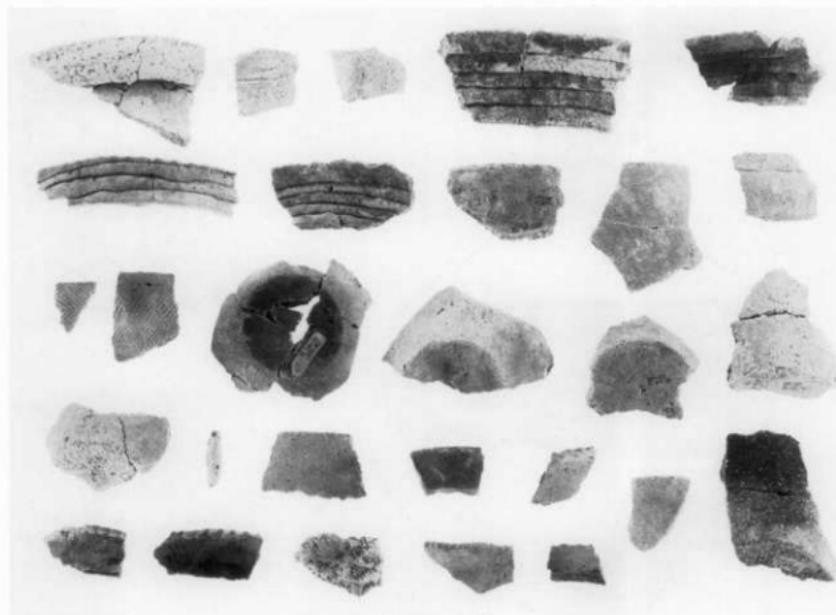
SI-006







出土土器・石器



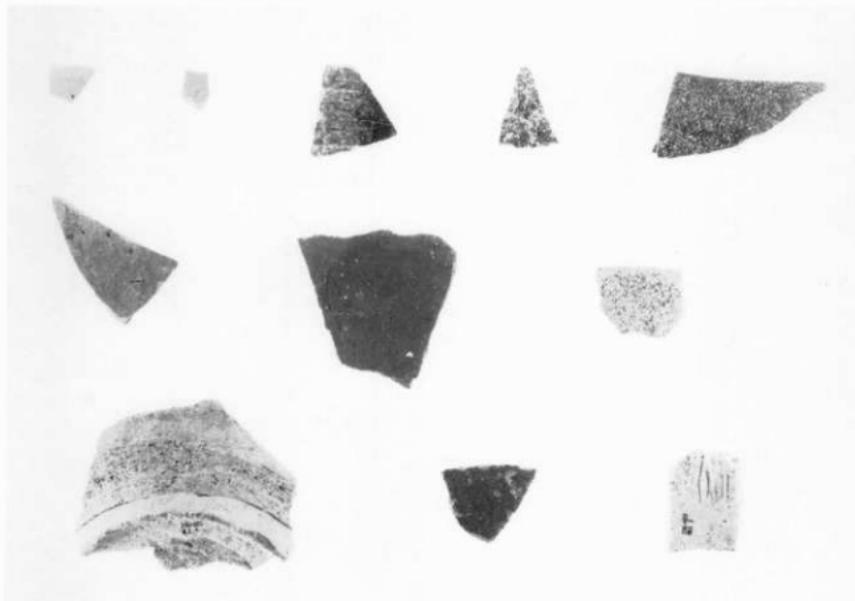
住居跡出土遺物



土坑・溝状遺構出土遺物



遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）

## 報告書抄録

ふりがな	きさらづしほういせき
書名	木更津市四房遺跡
調書名	県立木更津高等学校第2体育館埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第416集
編著者名	高梨友子
編集機関	財團法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯 °'\"/>	東經 °'\"/>	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
四房	千葉県木更津市文京 4-1-1	12206	023	35° 22' 27"	139° 56' 17"	20000703~ 20000804	803	県立木更津 高等学校第 2体育館改 築工事に伴 う埋蔵文化 財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四房	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	堅穴住居跡 上坑 溝状遺構 耕作痕	6軒 9基 9条 1か所	縄文土器・石鎌(後期)、 弥生上器(後期)、古墳 時代土師器、中世陶磁器、 砥石、土鍬、泥面子  砂丘列上から弥生時代後 期頃の集落が検出された

千葉県文化財センター調査報告第416集

木更津市四房遺跡  
— 県立木更津高等学校第2体育館埋蔵文化財調査報告書 —

平成13年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 大和美術印刷株式会社

木更津市潮浜2-1-10